



「戸隠神社太々神楽絵馬」

神楽（かぐら）の語源は、神座（かみくら）神のよりつく場）の略語です。神社の祭礼のとき、神様に捧げる歌や舞を総称して神楽といいますが、農耕の豊作を祈るものや、福を招くもの、また邪悪なものを追い払うものなどです。

天照大神が岩戸にこもられたとき、神々が岩戸の前で神楽を奏して再びこの世にお出ましにいただいたという日本神話があり、戸隠には岩戸開きに功労あった天手力雄命（あめのたぢからのおのみこと）・天思兼命（あめのおもいかねのみこと）そして岩戸の前で舞を舞った天鈿女命（あめのうづめのみこと）などが祀られています。また、天手力雄命が投げた天の岩戸が落ちて戸隠山となったという伝説は、古くから信じられてきました。戸隠の神楽は右のような伝承に基づき火之御子社（天鈿女命）の神主栗田氏と配下の徳武松王によって伝えられてきました。

戸隠神社太々神楽の歴史

平成26年[春夏号]
戸隠神社発行
〒381-4101
長野県長野市戸隠3506
026-254-2001

戸隠神社

江戸時代、天台宗の寺だった戸隠山頭光寺（現在の戸隠神社）では僧侶が本堂で大般若経を読み、一段下がった地の神楽殿で、栗田氏が祭主となり、徳武松王の采配で神楽が献奏されました。天明四年（一七八四）の永代太々神楽講設立が記録に見える最初で、以来毎年興行されました。費用として一回に十三兩二分（現在の百万円に相当）を使いました。内訳は、献膳料（お供え物代）・大般若料（信者の幸せを祈るお経）各三兩、神楽料（舞人の御礼や太鼓・神楽殿などの借り賃）七兩二分です。禰宜十名、巫女六名、六百巻のお経を読む僧侶が十八名という大掛かりなもので、一年に二〜三回しか行われませんでした。

明治以後、それまでの神仏混淆を改め、戸隠神社として整えられた際、太々神楽は、講員を始め参詣者の幸せを開く基本として、例大祭はもとより、月並祭そして献奏希望のあるたびに献奏されています。その陰に数々の苦勞がありました。明治元年（一八六八）の神仏分離令で、旧来の太々神楽が禁止になりました。還俗して神主の地位にあった旧衆徒が明治六年（一八七三）民籍編入を（神主の地位を奪われ農業をするように）命じられました。神楽を通じて神社奉仕を図ろうとして明治八年（一八七五）旧衆徒有志四名が上京、倭舞（やまとまい）を富田光美（とみたまつよし）・春日大社の神楽を伝承した師匠）に習い免許を受け、以後戸隠で祭礼時に行いました。明治十二年神楽禁止政策撤回により戸隠の太々神楽も復活しました。明治十七年（一八八四）富田光美が戸隠に来、当時は十七人に増えた門人らが献奏する倭舞を奉納しようとして、官司と対立しました。理由は、倭舞は内陣（祝詞をあげたり神事を行う

場所）で舞うものだという主張で、これに対し官司は「正当な格式を持つ戸隠太々神楽も舞台で舞っているのだから」ということとした。富田は奉納を断念し、以後、戸隠における倭舞は次第に衰退していききました。自分たちの費用で稽古し「官許」の誇りを掲げた倭舞と、それに負けない品格と伝統を守ってきた戸隠太々神楽です。

昨年伊勢神宮式年遷宮に際し、内宮特設舞台で戸隠太々神楽を奉納し、また伊勢神宮の神楽（倭舞）も奉納致しました。ひよっとしたら、戸隠の神楽も、倭舞になつていたかもしれません。戸隠太々神楽の独自性を守った当時の人々に思いを馳せれば、その先見性に圧倒されます。

月並祭には、太々神楽10種の舞が献奏され、拝観が可能です。
詳しくは、社務所にお問い合わせください。



奉祝神楽(平成25年10月24日)伊勢神宮神苑

※あをがき（青垣）とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

戸隠 去来抄 第二回
 文人と戸隠 林芙美子

芙美子と信州戸隠山

北九州市立文学館館長 今川英子

林芙美子にとって戸隠山での束の間の滞在は、澄んだ冷気に身も心も洗われ、俗塵やしげらみから解放される貴重な時間だったのではあるまいか。

……私が、本当に山好きになったのは六七年前信州の戸隠山へ登ってからです。……長野の駅で降りて善光寺裏から、七曲の胸突くような坂道を登ると、広々した飯綱原へ出ます。ここでは様々な小鳥の声が聴かれます。上を見上げると、白雲高くして嵯峨たりで、雲の去来もまことに見事です。

ほとんど毎年何週間かをこの戸隠山でおくるのですが、地味でいい山だと思います。初夏の戸隠は軀の芯まで染まってくるような鮮やかな緑ですし、初秋の頃は、雲と紅葉を美しいと思います。宝光



ヨーロッパから帰国後転居した、下落合の和洋式の洋館にて(昭和7年頃)(林 福江氏 提供)

社、中社、奥社と部落があるのですが、私は何時も宝光社諏訪という房へ泊ります。宿屋と神官と一緒にした家ですが昔ながらの建物なのでまるで昔の上にいるような静けさです。高山植物が沢山あるし、街に咲いて埃っぽいあじさいの花も、山の上では藍をとこしたように眼に浸みて来ます。

(戸隠山)より 初出「京都帝国大学新聞」昭和一〇・八・六

芙美子が初めて戸隠山に登ったのは、一九二八(昭和三年)七月。夫の緑敏とともに登山し、宝光社諏訪重雄方に約十日間滞在して、そのお礼に肖像画を描いたと記録が残っている。この年は、七月に創刊された長谷川時雨主宰の「女人芸術」に、翌月、詩「黍畑」を発表、十月に掲載した「秋が来たんだ(副題「放浪記」)が好評を得て断続連載となり、のちに改造社から『放浪記』として刊行されるやたちまちベストセラーになるといって、まさに芙美子の文壇登場への道が開かれた記念すべき年であった。以来、芙美子は度々、戸隠に足を運んでいる。

芙美子は一九〇三(明治三六)年、重工業都市北九州の黎明期に門司(現北九州市門司区)で生まれた(下関生誕説もある)。小学校は長崎佐世保、下関、鹿児島と転校するが、五年生のときに店を失敗した両親が筑豊の炭坑街を行動商、このころ二年近く足跡が明らかでない。その後は尾道に移り、尾道高等学校に進学。卒業後は、大学に進学していた恋人を追って上京するが、彼は婚約を破棄して帰郷してしまう。当時は第一次世界大戦後と世界恐慌による不況で、都会には失業者が溢れていた。裏切られた芙美子は東京に残り、職を転々としながら貧しいどん底の生活のなかで、『放浪記』の原型となる「歌日記」を綴った。俳優で詩人の田辺若男と同棲、アナキスト詩人の萩原恭次郎や高橋新吉、辻潤らを知り、詩を書き雑誌に発表した。その後詩人の野村吉哉と同棲、隣家には壺井繁治、栄夫妻が住み、近隣の平林たい子とは、カ

フェの女給をしながら詩や童話を出版社に売り歩いた。

一九二六(昭和元)年十二月、画学生手塚緑敏と同棲。穏やかな生活とともに『放浪記』の時代はここで終わる。緑敏は長野県下高井郡平岡村の養蚕農家の次男で、実家から仕送りを受けながら洋画の勉強をしていた。



夫・緑敏とともに 上落合の家の前で(昭和5年頃)(林 福江氏 提供)

生まれて以来、港町や炭坑街、工業都市や都会と、近代化の洗礼を受けた変化の慌しい街で育った芙美子にとって、緑敏に伴われて初めて訪れる信州の山々や村の様子は、清新で懐かしく、しつとりと落ち着いた風景であった。浮薄なこれまでの男と対照的な緑敏という誠実で温かな夫を得て、そこに美しい自然の風景が重なり、幸福な夫婦の物語として『清貧の書』が書かれた。

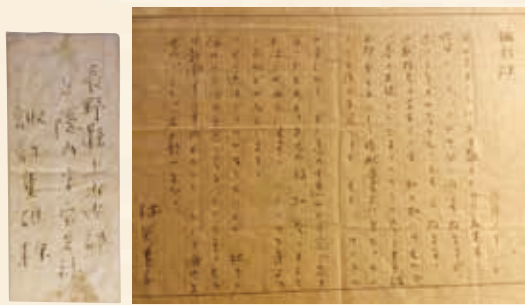
前の男によっていじけて意固地になっていた「私」が、新しい夫によって本来の伸びやかさと明るさを取り戻すという話である。ことに後半は、「山の聯隊」に招集された夫からの手紙によって、「私」のひねくれた心が一枚一枚薄紙を剥ぐように癒され、女心の微妙な揺れとともに、徐々に素直に健やかになっていく様子が豊郁と描かれる。「山から来た最初の絵葉書」にはじまり、三番目の葉書は「高原の白樺が白く光って、大きい綿雲の浮いた美しい写真」、五番目の手紙には「山は快晴だ」と結ばれ、「第七番目、第八番目、第九番目、山の兵営からの手紙は頬を染めるような文字で埋まっている。――吾木香すゝきかかるかや秋くさの、さびしき

きはみ、君におくらむ：眼の裏に浸みる歌のひとふしであった」と終わる。このように、「清貧の書」は、都会のどん底の生活で卑屈になった女が、山の清新な空気に触れて蘇生する物語として読むこともできる。宇野浩二から激賞された。

一九三一(昭和六)年十一月、『放浪記』の印税で単身渡欧。パリ、ロンドンに半年滞在。オペラ、コンサート、美術館に意欲的に通い、芸術の都パリの魅力を満喫。のちに建築家となる留学生白井晟一と恋におちるが、逃げるように翌年六月十六日帰国。八月二日から十日間、芙美子は恋の痛手を拭うようにひとり、戸隠へ出かけた。白井の面影を追った第二詩集『面影』が編まれる。

しかしその後は日中戦争、第二次世界大戦と「ペン部隊」の一人として勇躍。敗戦後は戦争協力への呵責と自責の念から、戦争で不幸になった庶民をひたすら書き続け、刀折れ矢尽きたように四七歳で急逝した。

このシリーズ名「戸隠去来抄」は、前出の「戸隠山(へ：雲の去来もまことに見事です)から引きました。(編集部)



芙美子から諏訪重雄氏宛の手紙(諏訪雅彦氏 提供)

いまがわひでこ氏 プロフィール

福岡県生まれ。日本近代文学会、昭和文学会、日本ペンクラブ会員。2007年北九州市立文学館副館長、2012年より現職。編者に『林芙美子 巴里の恋』、『林芙美子 放浪記アルバム』(監修)、『林芙美子全集』(編集)など多数。林芙美子研究の第一人者である。